

西谷山道迷い(2008年9月)

日帰りの予定で、道の不明瞭な北西側から登る。なんとか山頂へは登れたものの、下山で北東側の沢へ道に迷う。下山の時間も午後3時頃から下山しただしたため心に余裕もなく、判断を誤り避難小屋で泊まらず山中でビバークすることになる。翌日早朝に沢を下り、滝壺にも入り、地滑りの多い斜面を下る。沢を下り始め約1時間後に林道に辿り着く。北側に伸びる尾根の北西側へ下る予定が、反対側(北東側)の沢に下ってしまった。



解説

登山口が分からず、時間を費やし、さらに登山時にも不明瞭な道であった。登山道が地図上に書かれていないので、バリエーションルートである。登りは「収束し、下りは発散する」という言葉があり、登りは高いところに行けば頂上へ辿り着くが、下りは尾根の分岐がどんどん出てきて、道に迷いやすいということになる。

頂上に着き、昼食を済ませ、下山を開始したのが、15時過ぎていたことも冷静さを失う要因であった。すぐに林の中は薄暗くなり、バスの時間が迫っているという焦りが更に追い打ちを掛け、目印テープも失ってしまった。

この時点で、コンパスを利用せず、勘で下山していると推測される。冷静であれば、特徴物である「1650 mピーク(西谷山北側)」で、コンパスを取り出し、林道終点へコンパスセットを行い、進行方向(下る尾根)を確認しなければならない。つまり、理論で下山をしないと道に迷うのである。沢に降れば、なんとかなるといふ行動がたまたま成功したので、事なきを得たが、「滝壺から中々でられなかった」や「地滑り」という言葉からも大変な苦勞であったことが伺われる。読図とナビゲーションで大切なことは、①体力、②冷静、③技術だと思っている。ぜひ、心構えとして頭の片隅に入れて欲しい。